



創立1880年

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

Tel 03-6302-1960

URL <http://tokyo.ymca.or.jp/>

発行所 公益財団法人

東京YMCA

発行人 菅谷 淳

東京YMCA

3

2018年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

7年目の福島で YMCAスタッフ研修会



南相馬市のカリタスジャパンで行われた研修会
東日本の11YMCAから35人が参加した

1月24日～25日に第13回「東日本地区YMCAスタッフ研修会」が開催されました。今回は新たな試みとして、原発事故による避難指示が解除された福島県南相馬市小高地区と浪江町でのフィールドワークを行ないました。またマイノリティー宣教センターの金迅野牧師による『YMCAスタッフとしてのキリスト教理解』と題しての講座も合わせて開講されました。北海道から山梨まで11のYMCAから35名の参加者が集いました。

昨年11月に同地区で視察を兼ねた全国YMCA総主事会議が開かれ、マスコミでもあまり取り上げられなくなった被災地の真の姿を若いスタッフ

に訪ねることにより、新たなYMCAとしてのアクションを考える機会とすることが狙いでした。決して風化させてはいたくない原発事故の爪痕を肌で感じる貴重な研修となりました。故郷を愛し復興に向けて立ち上がる

被災地の現実に言葉失う

西東京コミュニティセンター

出沼 一弥

福島の現実とそこに生きる人々の思いを知るために、研修の初日は、被災地で支援活動等をしていく「カリタス南相馬」の方の案内で各所を視察

しました。マイクロバス窓から見た景色は、どこにもあるのかな風景なのに、なぜか時間が止まっているように感じられました。帰還困難区域

は、自由に立ち入ることができないようゲートが設けられていたり、道路沿いの家は防犯のためにバリケードが施されていたり、除染で取り除いた表土や草木を入れた黒い袋がいたるところに積み上げられていました。目に映る被災地の姿に私たちがスタッフは、言葉を発することができず、ただ目に焼き付けることしかできませんでした。

牛300頭の殺処分と牧場放棄という国の方針に反対して牛の世話をし続けている「希望の牧場」の方には、「いのちをどう扱うか」「正しさ

園庭に「ピンクシャツ」の文字を作成（このYMCAこども園）



全国でピンクシャツデー 「傍観者」にならないよう



山手コミュニティセンターでは、子どもや学生など、めめについた書きしたほかに、関連する絵本を展示しました。



高等学院で「いじめ予防授業」をした『いじめ予防推進法』の作成に携わった金さん（左）と憲法カレッジの代表の方（右）

いじめのない社会を目指し、今年も全国のYMCAは2月28日、世界的いじめ反対運動「ピンクシャツデー」を実施。東京YMCAの幼稚園やこども園、児童館、コミュニティセンターなどでは、子どもたちや教職員がピンク色の服や小物を身につけ、いじめ反対をアピールしました。また横浜や熊本YMCAは、

パレードをしたり動画を製作するなど、今年は全国的にも力の入った運動となりました。

東京YMCA高等学院はこの日、昨年に続き「ストップいじめ！ナビ」の弁護士チームによる「いじめ予防授業」を実施。いじめとは何か、どうすれば防げるか、法律をもとに学びました。

授業で弁護士たちは、いじめには被害者と加害者だけでなく、面白がつて見ている観衆と、知らんぷりしている傍観者がいるという「いじめ集団の4層構造」（森田洋司の「いじめとは何か」中公新書）を紹介。観衆と傍観者は直接いじめないもの

の、被害者を孤立させ、また加害者のいじめをエスカレートさせていく力となっていること。逆に傍観者がいじめに賛同しない雰囲気を作れば、いじめを抑止することができると語った。とはい

え、いじめに反対すると次のいじめのターゲットになることもあるため、「できることをできる範囲でして欲しい」と呼びかけました。

赤△三角

1850年、ロンドンでYMCAは、コヒーローのような「第三の語らいの場」であったといわれています。誰もが自由に来て、コーヒーや軽食を楽しみながら語り、そこから新しい発想や活動が生まれていきました。特に地方からやって来た若者たちにとって、YMCAは憩いの場で、友人を見付けることができた」と残されています。▼サードブレイスという言葉があります。ファーストブレイス（家庭、セカンドブレイス（学校・職場）ではない、一個人としてくつろぐことができる第三の居場所のことです。都心には居酒屋や喫茶店などは多くありますが、人が交流できる第三の居場所は少ないです。現在、YMCAも目的がないと集まらない場所になりつつあります▼今一度原点に帰り、会員や地域の方、青少年たちが自由に語り、安心して集うことができる「場」を機能の一つにしたいと考えています。誰にとっても居心地の良いサードブレイス。そこから新しい人との繋がりが発想、活動が生まれる。170年前のYMCAのような本来のコミュニティセンターを作っていきたいと日々模索しています。（南コミュニティセンター 岡田ナスカ）

「日本Y M C Aユースボランティア」に 東京Y M C Aの36人が認証

東京Y M C Aでボランティアをしている下記の36人が「日本Y M C Aユースボランティア」として認証されました。これは①16歳～35歳で、②半年以上の活動経験があり、③ボランティアの研修を受け、所属Y M C Aから推薦された方を対象とするもので、今年是全国で546人が認証されました。

日ごろの活動に感謝し、また今後のご活躍に期待します。
*順不同、敬称略

大木梨名	竹内京子	中島瑛莉香
内藤聡美	田中浩明	棚橋涼乃
笹尾ゆきな	張 有李	大島健太
佐々木勇太	道本そら	今野香菜
武田雅史	成田八十祐	八木田好葉
吉田胡桃	藤本文洋	和田明里
廣瀬幸太	古地友瑠	中村薫
濱部航史郎	堀米奈々	菅野攻太
菊地梨那	多賀井祐聡	石川奈都歩
小宮竜之介	久保大空	梅原大毅
品田峻太	細谷友佳里	関口舞衣子
下村春男	高橋一浩	多田睦

ユースボランティア募集中です！



Y M C Aの「ユースボランティア」に仲間入りしませんか？

子どもたちのキャンプや障がい児者のプログラムで、企画から運営までを担うのが主な活動です。「自分自身も成長した」「たくさんの人に会えた」、O Bからはそんな声もあります。詳細はH Pで。Y M C Aボランティア活動の魅力、先輩ボランティアの声など、ぜひご覧ください。

⇒ <http://tokyo.ymca.or.jp/volunteer/volunteer-leader.html>



入賞した学生と審査員たち。
最優秀賞のエンフバヤル・サインザヤ一さん (ENKHBAYAR SAINZAYA) は前列左から3人目。

2月9日、にほんご学院では恒例のスピーチコンテストを行いました。ベトナム、スリランカ、ネパール、ミャンマー、モンゴル、台湾、中国など9カ国150人の学生から選抜された17人によるスピーチは、留学生な

らではの視点とみずみずしい感性で、どれも心を動かすものばかりでした。今年度最優秀賞は、モンゴル出身サインザヤ一さんの「夢への道」。要旨をご紹介します。なお開催にあたり、ワイズメンズクラブから協

「夢への道」

エンフバヤル・サインザヤ一

賛をいただいたほか、会員の方も多数来場くださいました。感謝してご報告します。
(にほんご学院 柳原みずき)

皆さんの夢はなんですか？ 人はどうして「あなたに夢はありますか？」ではなく、「あなたの夢は何ですか？」と聞くのでしょうか。それは誰でも夢を見ているからです。夢というのは限りなく無限の世界だと私は思います。私にもたくさん夢があります。現実的な夢も、そうでない夢

もあります。その中のひとつは、日本の大学で経済学を学び、日本から学んだことをモンゴルに広めていくことです。そのために、第一歩を踏み出し、去年の4月にやっと憧れの日本に来て日本語学校に通い始めました。でも11月に実家から、来年の学費が払えなくなりましたという連絡がありました。それを聞いた時、私は落ち込んで病気になる、授業を何日も休んでしまいました。そしてその時、今まで大きな間違えを二つしてきたことに気づきました。

一つ目は、アルバイトのことで。日本に来たばかりの時、私は時給1250円のホテルウェイトレスの仕事を始めたのですが、そこはあまり長時間は働かせてくれませんでした。もしも私がその時に、もっと時給が安い仕事でも、留学生に許されている月28時間を働いていたら、少しでもお金が貯まって日本での生活を続けることができていたかもしれない、今ではそう思っています。

二つ目は、日本に来てから一人暮らしをしたこと。私はなんとなく「これからずっと一人なんだな」と勝手に思い込んで、誰かと話したり、自分の気持ちを分かち合うことなど一切しなかった。でも授業を休んだ後、先生たちといろいろな話をした時、初めて自分の心を開いて困っていることや悩んでいることを吐き出してみました。すると、風に乗っかっていようになつていた心の中には穏やかな風が吹き始めたような感じがしました。私は初めて人とのコミュニケーションという

のが、人間関係というのが、どんなに大切なのか少しわかったような気がしました。残念ながら、4月になつたらもう帰国するしかなくなつてしまいました。私の夢への道は少し遠くなつてしまいました。でも日本にきたことで得られたものもたくさんある、そう思います。

皆さん、日本の小説家、開高健という人を知っていますか。その人は「成熟するためには遠回りしなければならぬ」と言ったそうです。この言葉を聞いた時、私は自分の遠回りを後悔するのは止めました。むしろちよつとうれしかったのです。私は日本に来たことで夢への道は一歩さがつてしまいました。大人への道は二歩前に進むことができた。そう思っています。

ソプラノの歌い手として、音楽活動を続けている。取材当日も、山手コミュニティセンターの「わくわくサロン」で歌唱指導のボランティアをしていた。参加した高齢者一人ひとりに声をかけ、自身も豊かな声量で伸びやかに歌う。真っ赤な服で朗らかに指導する姿は、どう見ても放射線や抗がん剤治療を繰り返している方とは思えない。



Y M C Aの人

音楽家／山手コミュニティ活動委員ほか

越智京子さん



出身は博多。福岡Y M C AでボランティアリーダーをしたのがY M C Aとの出会いだった。結婚後は2人のお子さんを山手

るワイズメンズクラブの国際大会にも20回以上休まずに参加。海外でも「OKYO（オキョウ）」の名で親しまれる。「感謝と笑顔」をモットーに、あらゆる活動に関わり、たくさんの人と出会った。そして今、そのつながりが自分の支えになつているという。「人とのつながりがこそが財産です」。各国からのクリスマスカードも楽しみにだ。だから、がんで余命宣告を受けてもなお、今夏の韓国の国際大会に行く。「皆さんに会って嬉しいの」。『たんぽぽクラブ』の次期会長も引き受けることにした。「Y M C Aが好き。病気になつても関わり続けたい」。

(聞き手・文 広報室)
*インタビュー全文はホームページ。http://tokyo.ymca.or.jp/about/interview.html



総主事カフェ

東京Y M C A総主事

菅谷淳

先日東日本Y M C Aスタッフ研修会で、福島避難解除区域を訪問しました。実は11月に同Y M C A総主事会議を福島の南相馬で開催した際、あまりにもショッキングな現地の様子を目の当たりにして、「この姿をY M C Aのスタッフに、そして未来を担うユースに見せたい」と考えました。東日本震災より7年が経ちますが、福島状況はまだまだ復興からはかけ離れているという印象でした。

国内外で様々な支援活動や啓発活動を展開しているカトリックの「カリタスジャパン」が、南相馬にボランティアとして活動している方たちと

施設を運営しており、そこをお借りして研修を進めました。福島第一原発が見える立ち入り可能限界区域まで行き、汚染し殺処分される肉牛300頭の命を守り続けている希望の牧場や、南相馬小高地区で街づくりの草の根運動を続けている小高工房などを訪れました。バスから見る街の風景は異様でした。とにかく人がいない。家に灯りがついていない、シャッターが下りている、建物が崩れかけているなど、ゴーストタウンと化していました。2万人いた浪江町の居住人口が現在4000人。放射線量が下がりは帰還できるようになつても人の

住む街として機能していません。スーパードもコンビニもない、銀行も病院も開いていない、ガソリンスタンドも商業施設も閉鎖では誰も戻ってきません。7年という長い年月も、かつての住人に「復興」というよりも「あきらめ」を与えました。町のどこどこにある「おかえり、浪江町」という看板がむなしく感じられました。

小高工房の廣畑さんは、津波で街が崩壊し、友人知人とその家族がたくさん亡くなり、原発が爆発するという地獄のような状況下で途方に暮れていた時、まず発した言葉が「とりあえずご飯食べよう」だったと言われました。そして「自分は努力して生き残ったわけでない。これはきつと神様の計画だろう。生きて将来の良いことのために働けということだ」と悟り、ひたすら復興・支援活動を続けているとのこと。私は自然に涙がこぼれました。同時にこの問題を福島だけに押しつけてはいけない、日本中の多くの人にもまずこの地にきて自らの目で見て耳で聞き、自分の問題として考えて欲しいと思いました。特に若い世代が団結して立ち上がり、福島ユースと手をつなぎ、いつの日か福島Y M C Aを設立してもう一度子どもたちの笑い声と活気にあふれる街に戻れたらと心から願いました。

日中韓平和フォーラム

3カ国のユースが共同宣言



「第7回日中韓YMC
A平和フォーラム」が12
月16日〜22日、韓国・光
州市で開催され、韓国・

中国・日本から総勢150人が集まりました。光州市は民主化運動（光州事件）で多くの青年が犠牲になった都市で、韓国民主主義のシンボルと言われています。今回はこの地でユースが中心となつて、5日間のプログラムを企画。『民主主義について学び、北東アジアの平和構築のためにユースが動き出す』をテーマとし、充実したフォーラムが行われました。具体的には、講演および聖書研究をしたほか、市内の平和ツアーでは歴史記念館・記念墓地などを巡り、その後シニアとユースに分かれてのグループ協議を行いました。協議では、3国のユースに共通する問題として、雇用・

労働問題や家族のケア問題などにより未来に希望がもてない各国内の状況と、北朝鮮の核開発による脅威など国際情勢があげられ、その中でYMCAは、自由で平和な社会を築くために何ができるかが話し合われました。私が特に印象深かったのは、白熱した議論が深夜までにおよんだユースのグループ協議でした。アジアの国と日本は植民地支配に起因する歴史問題を抱えており、今もわだかまりがある一方で、日本のアニメや韓国ドラマなど文化面においてはお互いに親しみをもち、友だちになりたいと思っていることが印象に残りました。私は韓国や中国の人たちの意見を聞いて、日本との認識に相違点や共通点があることを実感すると共に、このような機会を通して、平和と民主主義についての相互理解を深めることが大切だと強く思いました。フォーラムを終えるにあたって私たちユースは今後、各国で平和教育を取り入れていくことや、「YMCAユース平和委員会」を設立することなどを提案し、「ユース共同宣言文」として発表しました。

これにより、より多くのユースが平和について考える機会が持たれることを切に願います。また私自身、このような機会が与えられたことを心より感謝しています。（会員部 神山智子）

東京-NY フロストバレー便り

ニューヨーク州にある「東京-フロストバレーYMCAパートナーシップ」では、12月と2月に4泊5日のスキーキャンプを実施しています。12月は最高気温がマイナス15度。一転2月は最高気温15度。大変な気温差に戸惑いながら、しかしキャンプ場は子どもたちの笑顔や歌声で溢れています。

このキャンプでは、日米両国からボランティアリーダーを募集しています。12月は4人、2月は7人のリーダーが、熊本、京都、神戸、東京などから参加しました。それぞれ所属YMCAでキャンプ経験を積んだリーダーですが、異国の地のキャンプはさまざまな刺激に溢れています。立地条件やプログラム内容、キャンプのスタイルなどはもちろん、コアバリュー（人格形成のための価値）、参加者のバックグラウンド、文化の違いからくる考え方の違い、言葉の違いなど。その違いはリーダーたちにとって、最初は戸惑いに似た感情を生みますが、後には固定概念にとらわれず物事をより柔軟に考えられるようになり、国際的な視点も含め、視野が広がっていくと確信しています。

参加する子どもたちは、3割以上が国際結婚、6割以上がアメリカで生まれ、9割以上が地元の学校で勉強しており、そのほとんどが補習授業校（主に土曜日に実施されている、日本語の補習を行う学校）に通っています。この意味するところは、大多数の参加者が日頃はアメリカ文化の中で英語で生活しており、同時に日本語の維持、習得あるいは日本文化の継承を求めているということです。

そんな子どもたちにとって、日本からのリーダーと過ごすこのキャンプは、大きな刺激となります。子どもたちは日本の学生リーダーたちから、日本語という言語だけでなく、日本そのものを感じることができるわけです。

さまざまな違いを認識し合う刺激的な非日常のキャンプ生活の中では、時として衝突や混乱があるものです。しかしお互いが理解し合い、認め合い、受け入れ合う中で1つとなる体験を重ねていくことで、世界の平和を求めていると信じています。（在フロストバレーYMCAパートナーシップ 鳩山徹郎）



「失敗を見守る。長い目で見る。信じる」。そうやって育てられたと語る金藤さんに、多くの共感の声が寄せられた

参加者は一般および社会体育・保育専門学校学生など136人。昨年の岡田武史（元サッカー日本代表監督）に続き今回もスポーツ路線で、リオデジャネイロオリンピック女子水泳200メートル平泳ぎで金メダルをとった金藤理恵選手に講演をいただいた。テーマは「人は変わることができなく指導・親との関わり」である。金メダルを取るに至った金藤選手の並々ならぬ努力が語られたのだが、副題にもあるとおり、最も



一人で食事をしなければならぬ、また保護者がいても弟や妹の世話などに忙しく孤独を感じながら食事をしていく子どもたちなど、子どもの「孤食」をテーマとした「下町子どもダイニング」を4月から月1回、東陽町コミュニティセンターで開催いたします。それに先立ち1月29日と3月2日、「下町こ

「下町子どもダイニング」が始動 子どもの「孤食」を防ぎたい

を感じながら食事をしていく子どもたちなど、子どもの「孤食」をテーマとした「下町子どもダイニング」を4月から月1回、東陽町コミュニティセンターで開催いたします。それに先立ち1月29日と3月2日、「下町こ

もダイニング お試し版」を開催しました。対象は小学生。20人の定員に対して、両日ともキャンセル待ちが出るほどたくさんのご応募をいただきました。また、保護者の方も数名参加されました。YMCAらしい子ども食堂の開催をと、学生ボランティアと一緒にゲームや歌を楽しみ、その後食事を作ってくださったボランティアも交えて、みんなで楽しく食事の時間をもちました。このダイニングは、最終的には家族と一緒に楽しく食事をする時間をもてるようになることを目的にしています。（会員部 沖利柯）

金メダリスト・金藤選手が講演 「人は変わることができる」

今年で12回目を迎えた「子育て講演会」は1月27日、こども園で開催された。

第12回
子育て講演会

大きな力を与えたのがコーチや父親の育て方であったことや、腰痛を始めさまざまな故障を乗り越え、目標に向かって親、コーチも一体となって死

に物狂いで奮闘してきたことなど、これまでの幼児教育論とは一味違った子育ての考え方が強調されたことが印象的である。「夢や目標は与えら

れるものではなく、作るものだ」という金メダリストの言葉は、子や孫を持つ我々の胸に残る。（実行委員 長澤弘）

もダイニング お試し版」を開催しました。対象は小学生。20人の定員に対して、両日ともキャンセル待ちが出るほどたくさんのご応募をいただきました。また、保護者の方も数名参加されました。YMCAらしい子ども

子育てコラム



今のときを喜びを 持つて生きる

最近『早期教育』について、メディアで目にすることがあります。保護者の方は、子どものこれからを考え、『早期教育』を取り入れるかどうか、悩むこともあるのではないのでしょうか。昨年4月に保育園・幼稚園・こども園3法令の改訂・告示があり、今年4月から施行されます。これにより3歳以上児は、幼児期に必要な教育を、どの施設でも受けられるようになります。

とは、いいことではなく、悲しみ・苦しみ・悔しさなどもすべて含めて、喜びなんだよ」と教えられたことがあります。子どもたちは一生懸命に遊び込む中で、友だちと楽しく遊べることもあれば、ぶつかり合いになることもあります。さまざまな経験の中で、困難と向き合いながらも前を向いて進むこと。そんな体験を重ねる中でこそ、「早期教育」だけでは得られない「生き抜く力」が育まれているのだと思います。これからの、一人ひとりの子どもにたくさんの愛情を注ぎ、生きる力を育んでいきたいです。芝浦アイランドこども園 副園長 江原 梢